

大正期大本教の宗教的場——出口王仁三郎、浅野和三郎、 宗教的遍歴者たち

吉永進一¹

要旨：大正期大本教には他の時期に見られない多様性、重層性がある。本稿では、出口王仁三郎の
皇道主義、飯森正芳、浅野和三郎らの知識人信者、そして遍歴の過程で大本教に入信した秋山真之、
谷口正治、高田集蔵などの例をあげて、大本教周辺に存在した場について論じる。

キーワード：大本教、出口王仁三郎、浅野和三郎、海軍軍人、宗教的求道者

はじめに

戦前の新宗教の中でも、大本教はいろいろな意味で興味深い存在である。もちろん、台湾や中国大陸への進出、超国家主義との連携、国体明徴運動との関係、二回の弾圧など、日本の近代政治史と共に大きく動いたことがその理由として挙げられるが、宗教史に限っていえば、文字通り新宗教の大本として、さまざまな運動がそこから発生していることがある。岡田茂吉の世界救世教を経由して手かざし、真光系の教団につながる霊術的な系譜、谷口雅春の生長の家からGLAや白光真宏会へとつながるニューソートの系譜、あるいは友清歆真の神道天行居、岸一太の惟神会、中野与之助の三五教といった神道霊学系の団体がある。さらに、浅野和三郎の心靈科学研究会、小田秀人の菊花会、矢野祐太郎の神政龍神会も大本教から派生している。たいへん広い範囲に影響を及ぼしている。そのような大本教の影響力の広さはどこから来ているのだろうか。

大本教が、出口なおと王仁三郎の二人のカリスマを有しているということはひとつの原因である。明治末の段階で、すでに、なおの神諭と、王仁三郎の霊学や国学によって体系づけられた宗教思想とが存在していた。なおの教団の後継者であった王仁三郎

によって、なおの神諭の解釈作業も同時並行していたはずである。大正時代になると飯森正芳、浅野和三郎をはじめとして、知識人、宗教家（霊術家）、軍人などが大本教に参加している。さらに、なおの三女福島ひさに下った「日の出神諭」や、大本教肝川支部の車小房の伝える啓示など、新たな神話体系の作者＝霊媒も大本教の圏内に出現している。こうした人々が、なおの神諭と王仁三郎の霊学をさらに解釈し、あるいは批判して、また新たな宗教思想を生み出している。前出の谷口、友清、岸、そして浅野などは大正10年前後に大本を出て、新たな一派を開いているように、この大正期の大本教はとくに人材が集まっていたが、言い換えれば大正10年の第一次大本事件直前、大正期の大本教団は内部が四分五裂の状態であった。その後は、王仁三郎への救世主信仰と『霊界物語』を軸に大本教はまとまる。しかしその周辺には菊花会のようなスピリチュアリズム系の団体、神政龍神会のように竹内文献のような偽史を教義に取り入れた団体も出現している。

本稿では、第一次大本事件前、大正期の大本教に焦点をあてて、王仁三郎の皇道主義的な神道思想、飯森正芳と浅野和三郎、そしてその他の宗教遍歴者たちを紹介することで、いわゆる「民衆」宗教とは別の相貌に光をあててみたいと思う。なお＝王仁三

1 舞鶴工業高等専門学校人文科学部門 准教授

郎の思想を核とした同心円的な構造と、宗教遍歴者たちの多中心的な場¹の重なりという形で大正期大本教の全貌は描けるはずであるが、今回はそのための試論となる。

1. 出口王仁三郎と大正期大本教

明治25年、出口なお(1836-1918)に良の金神が憑依したことによって大本教は開教されている。その生涯と思想については安丸良夫『出口なお』が詳しい。福知山の木工、桐村家に生まれ、綾部の出口家に嫁ぎ、極貧の生活、夫の病死、長男の出奔、娘の病気などの不幸に耐えていく中で、神がかり体験を得て、56歳の旧正月に良の金神への信仰に目覚める。大本教の出発点となった、彼女の有名な「初発の神諭」とは以下のようなものである。

「三ぜん世界一度に開く梅の花、良の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構はな行けぬ国であるぞよ。外国は獣類の世、強いもの勝ちの悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ。外国人にばかされて、尻の毛まで抜かれて居りても、未だ眼が覚めん暗がりの世になりて居るぞよ。是では国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の立替へ立直しを致すぞよ。用意を成されよ。」²

公開されたお筆先は王仁三郎の編集したものであり、なおが最初の神がかりで得た言葉かどうかは確認できない。しかし安丸良夫も指摘しているように、ここには彼女の思想の根本がうかがえる。彼女にかかった神は、病気治しや災厄払いなどの「おかげ信仰」には収まりつかない神であり、「世界の根源的な変革を告知するという大枠は、最初の神がかり以来の基本的特質」³で、「地域社会の人々に既知のものであるような神仏の categorie を超越している」⁴ものであった。旧来の神統譜にも入らず、あるいは呪術的世界も超えた存在として、理解不能なものでありながら、世界を根本から改革する神という性格づけは、その後の大本教の進路を考える上で重要である。なおの周辺には原大本教団というべき集団が

構成されてはいたが、彼女についての神の正体は判然とせず、明治31年、なおの三女福島ひさは、自分の経営する茶店に立ち寄った上田喜三郎を、なおに現れた神を見分けてもらうために教団に引き入れている⁵。つまり、一種逆説的ではあるが、旧来のカテゴリーへの分類不能さが、王仁三郎の入信とその後の発展を用意したのである。

出口王仁三郎(1871-1948)⁶は、旧名は上田喜三郎、亀岡の穴太村に生まれ、教育こそ無かったが若い頃から進取の気象に富み、獣医や酪農などの新しい職業にも挑戦しており、この点では西洋文明に対して否定的な態度をとったなおと対照的である。彼は、宗教に関心を持っていた一方で、村の侠客まがいの生活を送っていたが、その生活が一転するのは明治31年からである。

明治31年、やくざとの揉め事がきっかけで、穴太村の西にある高熊山の岩窟に一週間こもって修行を行い、この間に天狗(洋服を着ていたという)から霊能を授けられ、岩窟を出てからは行者としての活動を開始する。

この年、彼の人生は急転回している。静岡県安倍郡不二見村(現在、静岡市清水区)に本部を置く稲荷講社の布教師から幽斎(神がかりのこと)を学び、神がかり研究のための小グループを組織する。喜三郎はさらに本部へ行き、総長の長沢雄楯(1858-1940)に入門し、皇道霊学会という名前で稲荷講社から認可を受けている。

さらに同年10月には喜三郎は、先述のように福島ひさの手引きで綾部に赴き、なおと対面している。それまでなおは、金光教々会の布教所に所属せざるを得なかったが、なんとか自らの神を中心とした独立した教会を建てたいと望んでいた。喜三郎は、なおに協力することを承諾し、明治32年、稲荷講社から認可を受け、なおの周りにいた信者たちを組織して、金明霊学会を発足させる。信仰面はなおの神を中心としていたが、組織としては長沢の稲荷講社の下部組織であった。

長沢雄楯の主宰する稲荷講社は、長沢の師匠である本田親徳(1823-1889)の大成した鎮魂帰神法を教

える団体であった。本田は薩摩藩出身の幕末の国学者、神道家で、神代の神がかり方を”再興”したとされる。その方法は、神主（神がかりする者）を神前に座らせ、岩笛などを奏して神がかりさせるというもので、審神者（さにわ）と呼ばれる役目の者が神主に相対し、神主にかかり審神者に語ってくる”もの”が正神か邪神かを古事記、日本書紀などの神典によって決定し、邪霊や動物霊が出現した場合にはしかるべき手順で祓魔を行う。審神者は神典に通じていると同時に、神主の急激な変化にも落ち着いて対応する胆力も必要とされる。それまで宗教の現場で発生していた憑依現象を、国学によって再編、理論化し、制御可能な形にしたものが鎮魂帰神の法である。長澤は一時期静岡に滞在して本田より行法の伝授を受けている。清水の御徳神社や月見里（やまなし）笠森稲荷神社の神職を務め、その傍ら講社を通じて行法を伝授していた。

喜三郎は、宗教者生活を始めた当初は、なおのみならず、他の女行者とも協力を模索していた。喜三郎からすれば、なおも丹波地方に多くいる行者の一人であり、彼女が果たして真正の神の言葉を伝えているのかどうか、審神者である彼からすれば、おそらくそう性急な判断はできなかつただろうと思われる。

明治33年、上田喜三郎はなおの末娘すみと結婚して出口家に入り、なおの後継者となる。しかし、その後もなおと喜三郎の間で教団運営をめぐる論争が絶えず、なおのお筆先によって、「鬼三郎」という屈辱的な名前への改名を迫られた喜三郎は、明治36年、「王仁」という字をあてて改名している。この当意即妙の切り返しはいかにも彼らしいが、こうして王仁三郎という名前が誕生した。

さて、鎮魂帰神の法では、超越的存在の高下、正邪を審判するシステムが備わっているが、その判別には国家神道の”正典”、つまり古事記、日本書紀が用いられる。したがって、新しく出現する神に対しては排除するか、もしくは神典に合わせて神名を改変することになる。たとえば、なおにかかった良の金神には、のちに国常立神という神名が与えられ

るように、一定の自己規制の方向に働く。逆に、なおは稲荷講社の下にいるのを嫌った。しかし、王仁三郎は、明治憲法下での宗教政策においては、公認宗教との折り合いをつけなければ、私的神話にとどまり、公的な場に出せないことを弁えていた。そこで記紀神話という大義名分を与えることで、活動の場を広げようとした。あるいは、良の金神を丹波の方言とすれば、国常立神という標準語の神名を与えようとしたわけである。ただ、これは一方向的な封殺という作業ではなく、逆に言えば国常立神に良の金神の物語を与えて、国家神話を改変しようという大胆な戦略でもあった。良の金神というローカルな存在をナショナルな存在へと普遍化していく。この作業は王仁三郎自身にとって、良の金神を自分自身の宗教経験や霊学と折衷させて、どう理解し内化していくかという作業と絡むはずである。

ともかく明治39年、王仁三郎は、なおとその周辺の古参信者たちとの抗争から逃れる意図もあって、綾部を出て京都に設立されたばかりの皇典講究分所に第一期生として入学し、半年間の学業の末、神職の資格を得ている。その後、建勲神社の神職、御岳教の教師を勤める。しかし明治40年末には綾部に戻り、当時最低の状態であった大本教の建て直しを計ることになり、明治41年、金明霊学会を大日本修斎会に改め、ここから王仁三郎主導の教団運営と、本格的な宣教が開始されることになる。こうして大正年間にかけて、田舎の小教団から本格的な宗教運動へと飛躍的な成長の基礎が固められるが、そこには神職の経験が影響を及ぼしている。

明治41年10月13日改正の大日本修斎会々会則⁷では、第1条で「皇室を欽仰し、国体の尊厳を言明し、神祇の洪徳に報謝」と述べ、第2条では神典国史の幽玄な神理を明らかにするため、「天地の真象」「万有の運化」「活物の心性」の観察によって真神の「体」「力」「靈魂」を理解せよと謳っている。会則の根幹は、国家主義、経験に基づく宗教理解に置かれ、出口なおの神については表面的には隠される⁸。王仁三郎主導のもと、大本教は拝み屋宗教を超えた、かなり野心的なビジョンを打ち出している。

この時点での王仁三郎の思想を知るために、ここではさらに「大日本修斎会創立要旨」を参照しておく。同要旨は8項目からなるが、それぞれの項目の内容について、論者は以下のようにまとめた。

- 1 思想の混乱
- 2 万教の最高神の一致
- 3 教派神道批判
- 4 祭政一致主義
- 5 楽観主義
- 6 治産主義
- 7 生成繁栄、活動重視
- 8 他の純神道団体批判

以上の8項目中、1から4については特に重要と思われるので、さらに説明を加えておく。

まず1の思想の混乱とは、西欧思想の流入によって日本が悪化しているという主張である。実際に思想の混乱が起こっていたかどうかはともかく、明治40年代は大逆事件でも分かるように、反動が進み、社会主義への警戒心が高まっていた時期であり、大日本修斎会々則と同日に発布された戊申詔書は、まさにそうした思想の混乱への対応策であった。

2については、次のように述べている。

「日本魂は如何に他邦人の練磨修養せんと腐心するも、固より可能的心性を有せざるを以て、決して会得すべからざる日本国民の専有に属する至大無量なる神賦の分霊に外ならざるものとす。此に於てか世人の多くは或は疑はん、宇宙万有を造れる至慈至愛の神は一視同仁にして万国同氏に坐せり。」⁹

「大極、天、大日如来、弥陀天帝、仏、エホバ、ゴッド、ベールス、イラー、ゼウス、ゴタ、アダム、イブ、アラマ、ビシニス、シウアと称するは・・・等しく之れ同一物なるが如きのみ[。]神の御名こそ異りたれ列国の何れもが各個別々に、宇宙創造の神を有すべからざるは無論にして」([]内論者補足)¹⁰

いくつか意味不明の神名も出てくるが、第一の引用は最高神の分霊としての日本の優秀性を訴え、第二の引用では万教の一致を唱えている。こうした比

較宗教学的知識の背景には、おそらくは皇典講究分所での教育があるように推測されるが、いまだ確証できていないので指摘にとどめておく。ともあれ、この万教帰一主義は、その後も大本教々義の大きな柱の一つとなっている。

3は、当時の大本教の戦闘的な姿勢をよく示している。実際は王仁三郎自身も御岳教、大成教などの教師を勤めていたが、既成の教派神道には飽き足りないものがあつた。教派神道を祈祷や占いで儲け、向上的信仰や国家秩序を妨げるものとして、厳しく非難している。また教義にも「純神道」が含まれない点を批判する。それでは純神道とは何かといえ、
「神秘の奥妙を会得」し「幽顕の両界裡に自在に出入」できる神道のことである。つまり王仁三郎は本田親徳流の神道霊学を純神道と想定している。

4については、王仁三郎は宗教と政治の一致した国家体制を理想としていた。その後、大正5年になると、大本教は「皇道大本」と改称し、宗教よりも一段上の位置におかれた神道、その神道をさらに越えた「皇道」という概念を提唱した。さらに『神霊界』43号(大正6年1月)掲載の「皇道と神道との区別」によれば、皇道とは天皇の政治の道であり、「世界を統轄して平らかに安らかに治むる教政を総称するの義にして。神道とは世道人心を教導すべき根本的教育の本源也」と述べている。つまり、大正6年の時点では国家を越えて、世界支配にまで視野が及んでいる。

王仁三郎はさらに、大正7年、「国教樹立に就て」という重要な記事を書いている(『神霊界』大正7年3月～5月)。その中で、まず皇道を日本の根本的な教義とおく。

「皇道即ち大本教は、天地初発の時より大日本国に因縁し、肇国の本来より先天的に密合して離るる事の出来ない、根本の大教義であります」¹¹

そして明治維新の際に「神政復古を企図し給い、乃ち明治三年正月、祭政一致の詔旨」¹²を出したが、大教院の廃止で、その企図はかなわなかった。この失敗した国教樹立を行うのが大本教であると、王仁三郎は主張する。

「大本教は諸宗教、諸教義の統一的資格を有し、且つ完全円満にして、国体の根本基礎をなし、中外を一貫し、古今に通じたる権威」¹³である。

諸宗教が統一しうるのは、そもそも神が実在するからで、それは宇宙であるという。「宇宙の実在は神である。無量無辺の現象は即ち神の意思の発作である。現象は即ち実在である。」¹⁴とも述べているが、これは明らかに井上哲次郎の現象即実在論の引き写しに他ならない。

ここまでの王仁三郎の所説は、祈祷や占いによる金儲け主義に走る既成神道への批判、それに対置されるべき理想的「純神道」の提唱、そして祭政一致の理念の再興と、大風呂敷といえば大風呂敷だが、神道を宗派から解放し、純化させ、明治維新期に構想された理想的姿に戻そうという、いわば神道原理主義とも言えるもので、民衆的というよりは、むしろ近代的で知識人的な宗教思想である。そうした自己規定に加えて、鎮魂帰神の法のように、憑依という実経験によって神々への信仰が基礎づけられるならば、そこになおの神諭という、記紀神話とは別の神話が加わる必然性はない。また実際に、友清九吾（歛真）のように、鎮魂帰神の技法を継承するために、大本を離れて長澤雄楯のもとへ走った信者もいる。

とはいえ、なおの思想と王仁三郎の思想がまったく別個かといえば、そうでもない。王仁三郎の神政復古の論は、なおの神諭に直裁に表現された立替立直のイメージ（三千世界、一度に開く梅の花）を、王仁三郎なりに合理化したものと読み取ることができるからである。この王仁三郎の神道霊学の技法、神道原理主義の体系、なおの封じ込められた神への一徹な信仰、そして両者をつなぐ現実変革への希望という二重構造をもった宗教世界が、大本教の豊穡さの根本にあったといえる。ともかく、「皇道」と国家主義的な外装によって、大本教は新たな信徒を獲得し、次のステップに進むことができたことは、次の節で論じたい。

2 飯森正芳と浅野和三郎

王仁三郎は、明治41年8月大日本修斎会を設立すると、翌月には機関誌『本教講習』を発行、翌年には機関誌『直霊軍』を創刊するなど、積極的に文書伝道の体制を作り上げている。既成神道の祈祷、お守りへの依存を批判した王仁三郎であったが、実際には、おひねり（なおが「うしとらのこんじん」と墨書したもの）などの呪符を出すことで一般信者を集め、熱心な者には鎮魂帰神の法を伝授していた。さらに大正7年頃からは、なおの神諭にある終末論に具体的な時間を設定して「大正十年立替立直説」を唱え、世の終わりを宣伝していた。

一方、大正3年には直霊軍という宣教組織を結成し街頭宣伝を開始している。当時は熱心な大本教信者は髪の毛を切らなかったために、その異様な風袋で耳目を集め、都市部での大本教の存在感を高めるには効果はあったが、信者勧誘にどれだけ効果があったかは疑問である。

大正期の大本教の特徴は、農村の小教団から都市への展開という点にあるとはよく言われている。「皇道大本教信者職業別人数」（大正10年3月末日調）¹⁵によると、信者計5806名の内、農業が1995名、商業が808名である。医師55名、中等教員63名、小学教員121名、銀行会社員129名とある。軍人は、現役将校37名、在郷将校51名、現役下士官39名が含まれるが、これは大本教禁止令が出た後のことなので最盛期はかなり多かっただろう。大正10年時点ではある程度の都市化は果たしていたが、やはり農業が3分の1強という多数派を占めていた。

大正初期に遡れば、農業従事者の割合はさらに多く、中等以上の教育を受け、文章の書ける人間、組織力のある人間、あるいは教師となる人間が不足していたのは明らかである。さらに言えば、なおの神諭と王仁三郎の霊学として教義の骨組みは提示されていたものの、両者の間にはかなりの違いがあり、その間をつないで一貫した体系にもたらず教義解釈者も必要であった。王仁三郎が知識人を積極的に勧誘し、すぐに教団の幹部に据えているのは、こうした人材面での脆弱さがあったからである。

『大本七十年史』での大正期の入信者分析¹⁶によれば、『神霊界』『大本時報』に掲載された「入信の経路」45例の内、立替立て直しと世界統一に共鳴したものが12例、立替立て直しと鎮魂帰神に共鳴したものが17例で、病氣直しは2例に過ぎない。実際には病氣直しの信心は多かったと思われるが、立替立直や鎮魂帰神による回心が多いのは大本教の特徴であろう。また『七十年史』編纂時点での当時の入信者へのアンケートでは、回答291例中、中学卒業者が30%以上おり、教義や立替立て直しに共鳴したものが57%。病氣直しは11%という。こうした調査が全信者の動向を反映しているか否かは疑問ではあるが、現世利益よりも、より求道的な関心や、宗教的予言によって大本教に向かった信者層は、この時期の大本教の特徴である。

そうした求道的な傾向を体現しており、知識人の大本教参加の嚆矢となった人物が飯森正芳である。飯森加入の縁で、浅野和二郎が大本教に参加し、それが大正期の飛躍的な教勢拡大につながることになる。以下、この二人の入信経路、そしてその思想を辿ってみたい。第一次大本事件以前の大本教の組織面と思想面の動きは大筋で理解できよう。

飯森正芳(1880-1951)は能登穴水町の士族の家に生まれ、石川県尋常中学校を経て、明治29年海軍機関学校に第6期生として入学。中佐まで順調に昇進するが、預言者、宮崎虎之助に傾倒し、大正3年には海軍を辞職¹⁷。横須賀にあった海軍機関学校の外国人教員で神智学徒のE・S・スティーブソンを介して神智学に関心を持ち、アメリカのサンディエゴにあった神智学協会本部に移住することも計画していた。その飯森が、大正4年、アメリカへの移住直前、挨拶に福中のもとを訪れ、彼から大本教のことを聞かされる。福中铁三郎予備中佐は長男の病気が縁で大正2年に綾部を訪れ、すでに大本教に入信していた。興味を持った飯森はそのまま綾部を訪問し、入信している。おそらく海軍軍人であるというだけでなく、福中とちがって、宗教運動に通じていることが評価されたのであろう。大本教に入ってまもなくの同年11月、綾部に移住した飯森は、大

日本修斎会の会長、教学研鑽の組織「根本学社」の学長という要職に任じられている。

飯森は、綾部に移住した直後から宣教の最前線に立って活動している。8月28日には新舞鶴で、軍艦香取の乗組員250余名に講演、但馬へ布教、同年、全国布教の実行部隊、直霊軍が発足すると、出口なおの三女、福島ひさと共に各地に出張している。そして同年末には横須賀へ行き、石井ふゆ(通称、三峰)なる女行者を訪問した際に浅野和二郎に出会い、大本の教えを吹き込んで、浅野の大本入信の道を開いている。

飯森の友人で、やはり宗教求道者であった高田集蔵は、大本入信以前の飯森について、次のように書いている。

「米のセオソフィカルソサエチーの会員、トルストイアン、全租税論者、而して歩むに蟻を殺さぬ用心をする予備海軍機関中佐。愚か、狂か、知らず。彼一日飄然として我が庵を訪う。余亦テケリとして相對す。どうも他人とは思わざれし也。興至れば語り、尽くれば立ちて働く。飯あれば食らい、無ければ敢て食わず。忽ちにして山寺に老衲を驚かし、忽ちにして都市熱踏の渦中に投ず。」¹⁸。

飯森の理想は、自由な宗教コミュニケーションの実現であった。ポイントローマの神智学協会も、ある意味ではそれに近い。飯森は、宮崎虎之助の教団も大本教に参加させて、逆に綾部を自由宗教の拠点にしようと計画しており、それについて宮崎とも議論していたようである¹⁹。

しかし、彼の理想は綾部では果たされず、大正5年末に浅野が綾部に移住してきてしばらくすると、飯森はひっそりと綾部を去っている。

浅野と飯森の大本教への関わり方の差は、浅野の自伝『冬籠』からもうかがうことができる。浅野の飯森についての評価は厳しい。

「飯森さんは口には大本神諭を尊重する。・・・しかし、飯森さんはドウも出口先生その他二三人を信ぜぬらしい。・・・飯森さんは霊学を排斥して、催眠術の一種であるなどと言いたがる。神諭の中には、明かに世の立替立直しが幽界と共に現界にも及ぶ所

の一台事実であると教えてあり、実際又神諭に警告されて居る通りの事が、明治二十五年以来、着々として現世界の表面に出現しつつある。しかし飯森さんは、神諭の立替立直しは単に精神界丈の事で、現界とは没交渉だなどといったがる。」²⁰

飯森は自らの宗教思想のフィルターを通して大本教を眺め、浅野はナイーブに予言を信じきっていた様子がうかがえるが、これについては高田集蔵の友人で、大正5年暮れから大正6年にかけて『神霊界』の編集に当たり間近で浅野、飯森の両名と接していた宮飼陶羊も同様の証言を残している²¹。

浅野和二郎(1874-1937)は、飯森にかわって大日本修斎会の会長となったが、元来は海軍期間学校の教員で英文学者である。機関学校では芥川龍之介の前任者としても知られる。帝国大学で小泉八雲に学び、学生時代は小説にも凝り、美文で知られた。大学卒業後、明治33年に横須賀の海軍機関学校に職を得て、馮虚の号でシェイクスピアの翻訳などを行う。大正4年に三男、三郎の病気を機に横須賀にいた石井ふゆという女行者にかかり、そこで霊能力を経験する。大正4年暮れ、前述のように宣教のために横須賀を訪れていた飯森と出会い大本教を知る。浅野は王仁三郎から鎮魂帰神の法の伝授を受けて、神霊の超越的存在を信じるようになる。同僚を巻き込んで鎮魂帰神の実験を繰り返し、短時日で審神者として熟達していく。浅野は思い込んだら一途の性格であったようで、しばらくは王仁三郎の言うままに、わき目もふらず鎮魂帰神の法に熱中し、大正5年の夏は神諭の研究に没頭している。綾部移住後はすぐに『神霊界』の編集にあたり、大正6年1月1日機関誌『神霊界』の43号(前身誌から通算した号数なので実質的な創刊号)を発行している。編集だけではなく、大本教の教義や鎮魂帰神の実際について、達意の文章で書き綴っている。それらはさらに単行本として出版され、知識人たちに大本教義を伝え弁護する役割を担った。

浅野は、鎮魂帰神の実践だけでなく、なおの神諭に黙示された大正十年立替立直説を真剣に信じ、元ジャーナリストで政治活動家であった友清九吾らと

共に積極的に終末論の宣伝にあたった。思想の面では王仁三郎の霊学となおの神諭の両者を受け継ぎ総合する位置にあり、また組織の面では、大本教の買収した『大正日々新聞』の社長に就任するなど、その大車輪の活躍で、大正十年の第一次大本事件直前まで、外部からは実質的な大本教指導者と目されるほどであった。

浅野の大本教思想は、いくつかの出版物に残されているが、大正8年2月27日に行われた聴取書では、以下のように答えている。

「皇道とは皇祖、皇宗の御遺訓の実行を意味し又大本とは実行の大中心たることを意味しますつまり一つの教え其のものを指すのです而て御遺訓の実行とは日本の世界統一に対する日本臣民の覚悟を教ゆることであります」²²とあり、王仁三郎の皇道論をそのまま引き継いでいる。

大正十年立替立直説については、それは「日本対世界の大戦争、日本の世界統一、天災及疫病の発生世界人口の大減少(十分の七死す)綾部が世界の都となること等で」²³、「今年とも明年とも神諭には出て居ないが大正十年は大転換期であることは神諭でも明かにして又世界の大勢から常識的に推考しても私は実現するものと確信」²⁴していた。その際に天皇は綾部に難を逃れるとする。「内地戦で東京市は元の薄野になると神諭は教えて居ります従て陛下は京都御遷都より続いて丹波綾部町に御遷りになる場合もあると信じます」²⁵。そして終末戦争後は、天皇の世界支配、祭政一致、私有財産の撤廃、貨幣の廃止、職業の世襲、服装の固定など、”反近代”的な世が実現すると解説している。

この供述を王仁三郎のものと比較すると、ほぼ同じ内容であることから、これが当時の大本教の「公式」な立替立直説であったことが分かる。浅野はこの説を額面通り受け取り、大本教が天皇制と矛盾するとは考えていなかった。天皇制の擁護と大本教の特権性という矛盾した主張を、最終戦争という危機的状况によって結びつけたと言えるかもしれない。

この節の最後に浅野と飯森を比べておきたい。まず以上のように浅野は、かなり過激な国家主義思想

を抱いていた。その点でもトルストイ主義者の飯森とは相容れなかったのではないかと思われる。浅野は、鎮魂帰神を介して、日本の憑依宗教文化に魅せられていったが、飯森の側は鎮魂帰神を催眠術と考え、それを神霊の存在証明とは考えていなかった。これは神智学徒スティーブンスの影響と考えられる。というのは、浅野の自伝には「鎮魂は催眠術の一種であるから、直に禁止せざるべからずといきまぐ靈智学徒」²⁶として、スティーブンスが出てくるからである。また終末予言を素朴に信じ込む浅野に対して、飯森は精神的なものであると、むしろ合理的な解釈を施している。ここにも中年を過ぎて初めて宗教的な世界に入り込み、夢中になっていた浅野と、いくつもの宗教を遍歴してきた飯森との差が見られる。

大正10年以後、浅野も大本教を離れ、心靈研究協会を立ち上げ、欧米のスピリチュアリズムや神智学に、大本教で学んだ神霊観や鎮魂帰神法の影響が加わり、日本的なスピリチュアリズムを構築することになる。他方、飯森は、最後まで組織に属することなく、遍歴者を貫くことになる。

最後に、彼らの周辺にいた遍歴者として秋山真之、谷口正治、高田集蔵の3名を挙げておきたい。海軍、精神療法、そして個人宗教のネットワークという、大本教に隣接する社会空間の、それぞれ代表的な人物だからである。

3 遍歴者たち

飯森正芳、浅野和三郎の縁で、その後、多くの海軍軍人が綾部に来ている。理由のひとつに軍港、舞鶴が至近の距離にあるという地理的な条件もあった。

『神霊界』43号（大正6年1月1日）から59号（大正7年5月1日）にかけて、海軍軍人の大本訪問の記録が多数掲載されている（注参照のこと²⁷）。

ただし、海軍軍人の入信者が多数にのぼった理由は単に地理的なことばかりではなく、明治の公教育制度の中で宗教が排除されたことも、その遠因となっていた。海軍機関学校出身者でキリスト教徒の堤

健男の回想によれば²⁸徳育が不足していた。それはまた機関学校周辺では伝道義会という独立キリスト教会による伝道活動（飯森はこの活動の協力者でもあった）がそれなりの成功を収めていた原因でもあったと考えられる。

そうした海軍関係の大本参詣者の中でも、特に有名な人物では、上に出てきた秋山真之、浅野正恭海軍少将、山本英輔海軍大佐などがいる。浅野は和三郎の実兄で、後に弟と共に大本教を脱退し、弟の心靈科学協会に参加している。山本英輔はやはり宗教遍歴者で、戦後は四国の剣山でのソロモン王の財宝発掘という奇妙な事業に関係している²⁹。彼が大本教を訪問した時には鎮魂帰神を2回実施、最初は猛動猛行3時間という（49号、大正6年7月1日）。海軍軍人は鎮魂帰神を好んで実践していたが、鎮魂状態は猛烈で淡白なものが多く、すぐに体が動き出し、大きな声でどなつたと浅野は回想している³⁰。

秋山は日露戦争で有名な軍人であるが、これも浅野によれば、明照教、川面凡児、池袋の天然社などに出入りし、迷信遍歴者であったという。この天然社とは、岸本可賀美という神道教師の始めた団体であったが、ここに秋山ややはり後に明道会という一派を興すことになり岸一太などが拠っていた。この団体が瓦解してから、秋山や岸は大本教に入り込み、秋山は一時期はかなり深く大本教を信じていたようである。

浅野の自伝『冬籠』によれば、大正6年6月22日、秋山は『神霊界』をもって、某頭官を訪問し、布教を試みた。その場所で秋山は突然霊言を発し、6月26日の夜、東京に大地震があるという予言をする。秋山は、その予言を確信し、大本の説明と大地震説を高官に伝える。この予言失敗を境に、秋山は反大本に寝返ったのだという。ただし、秋山は大正7年に亡くなっており、この自伝執筆時にはすでに故人となっている。この事件の真偽は不明であり、宮飼陶羊は別の説明を残している³¹が、秋山が鎮魂帰神に熱中していたのは間違いない。

海軍軍人が鎮魂帰神を経て入信した直接的な理由として、浅野が伝えている秋山の言葉の言葉が参考

になるだろう。

「日本国から神を取り去った時に、何所に日本国の日本国たる所以があると思うか。敬神がなければ尊皇もなく、又愛国もない。日本の皇室、日本の国土が、永劫の昔から天地の祖神と、切っても切れぬ因縁関係があるという事が判ってこそ、初めて日本の国体の精華が判るのだ。」³²

国家や皇室を根拠づけるのは、国家の正史や記紀神話であったはずだが、大本教に依拠しようということは、すでにその効力が消えかけてきたということの意味する。鎮魂帰神は、実践者に神の存在を経験させ、国家イデオロギーを活性化させる効果があった。

大本教は、軍人には国家の聖化によって接近する一方で、心身技法という問題を經由して、精神療道家、霊術家と言われる民間治療家たちに接近していた。霊術家とは、催眠術、呼吸法、気合、手かざしなどの治療法を用い、形而上的な世界観を持ち、宗教と治療との間に位置した。両者の間には、競合と吸収という関係があった。

鎮魂帰神と霊術は、その説明原理は真正面から対立する。霊術の多くは、超自然的現象や奇跡的治癒は個人の精神を經由しての宇宙の大精神の力によって起こるものであり、人格的な靈魂や神靈の存在は認めていない。対して大本教では、神靈から天狗や動物霊の存在を強調していたわけである。しかし、無意識の身体の運動や超能力など、現象的には類似のものであり、信者（あるいは会員）たちにとっては、原理よりも術の効果が問題であった。そのために霊術は大本と競合していたが、特に顕著な例は霊術界では最大の団体だった田中守平の太霊道である。太霊道では元実業之日本社の社員だった栗原白嶺をはじめ、多くの会員が大本教に取られていた。そのため危機感を抱いた田中は浅野に会談を申し込んでいる。その会談の際、田中は浅野の鎮魂帰神を受けることになり、田中が霊の発動をしたかしないかで、両陣営の間での論争となっている。この論争の原因には、単に信者の獲得という問題だけでなく、人格霊の存在を認めるか否か（太霊道では原理的に人格

的な霊や神の存在を必要としない）という理論的な対立もあった。さらに太霊道も独自の国家論を有していた。太霊道の田中守平は、大正初めに中国大陸から内蒙古で活躍し、メディア宣教を盛んに行うなど、大本教とはパラレルな存在でもあった³³が、大正十年の第一次弾圧を経てさらに教勢を拡大した大本教と比べて、太霊道は大正末年から昭和にかけて急速に衰微していった。

一方、当時、大本教は教線拡大のために教師を必要としていた。そのために霊術家の入信を歓迎しており、「吸収」していった例もある。たとえば、松江で心理療法を行っていた木原鬼仏（通徳）は、岡田射雁（建文）の主宰していた雑誌で大本教の別働隊的な存在であった『彗星』によって影響を受け、熱心な大本信者となって綾部に移住している³⁴。

後に生長の家を興す谷口正治（後に雅春）も、「入信の経緯」からすると精神療法から大本に入った例である。彼は早稲田を中退して生活のために紡績工場の監督となる。その間、三角関係が悩み、性病に感染したのではないかと恐れ催眠術で病気を治そうとする。谷口は当時流行の霊術を実践し、その結果に大本教に行き着いた。彼は次のように書いている。

「何か霊的に人と社会を救済するような職業！太霊道や健全哲学や、渡辺式心靈療法やそして木原氏の耳根円通法や、いろいろの精神療法を研究していると、ある日松江から『彗星』と云う雑誌を送って呉れました。それに仍つて永い間不満足に思っていた社会組織が根底から立替へられる皇道大本なるものを初めて知ったのです。」³⁵

大本教の提示するビジョンが、個人の心身だけでなく、社会問題の解決法としての魅力を放っていたことがわかる。さらに谷口は、大本教時代、さらに『非医治療法批判(上)』という小冊子を著しており、非神靈的な霊術を批判している。『生長の家』におけるニューソートの要素と神道的要素の折衷の原点は、すでに大本教時代にあったように思われる。

霊術家たちは、いったんは大本教を恐れ、あるいは帰順しているが、突き詰めれば鎮魂帰神の法という術を大本教が独占的に伝授していたことが原因で

あった。しかし、大正十年立替立直説のアジテーターとして知られた友清九吾（歎真）が大本を離脱して長澤雄楯から直接、霊学を学び、それを印刷物として出版したことから、鎮魂帰神の法が比較的容易に習得可能になる。また霊術界の実力者、松本道別も同様に本田流の鎮魂帰神を実践している。霊術家たちの間でも鎮魂帰神はさまざまな技法のひとつとして流通するようになり、術自体の秘匿による権威は薄らいでいる。

最後に、軍や霊術などよりもさらに非組織的な、同時にきわめて宗教的なネットワークについて触れておきたい。

そのネットワークの結節点のひとつが飯森の友人であり、すでに文章を引用した高田集蔵(1879-1960)である。高田は岡山県勝山の出身で、14歳で高等小学校を卒業し、しばらく小学校教員を勤めたあと上京。19歳で受洗してキリスト教徒となる。日露戦争に召集された際には非戦論を公然と主張し、戦地では救護班として働いた。明治41年から個人誌『独立』、その後『村落通信』を発行する。大阪の海軍退役大尉、則定嘉久治の援助で堅下村大県（現・大阪府柏原市）に住み、個人紙の発行を続ける。ここには宮崎虎之助、出口王仁三郎、飯森正芳、江渡狄嶺、三浦修吾、岡田播陽、中里介山などが訪れてきたという³⁶。

高田は、飯森が入信したこともあって、大正4年、5年と二度にわたって綾部まで遊びに行くほど、一時は大本教に理解を示していた。さらに、高田の妻で社会主義者の九津見房子の再婚相手でありやはり社会主義者、三田村四郎の幼子を王仁三郎が預かるといふ縁もあった³⁷。

高田は、大本教についての希望を『村落通信』に次のように書いている。

「五月三十日朝、柏原局に郵便物差し入ればやと家を立ち出でしが、そのまま見えざる御手に導かれつつ、大阪へ出て、岡田（播陽）、藤井、村野諸氏を歴訪し、終わりに神沢氏の同意同伴にて、丹波綾部に大本教本部（綾部町外本宮村に在り）を訪い滞留三日・・・時は正に来ました。中臣の祓を為すべき

時が来ました。唯に社会国家の上のみではない、宇宙の大修祓をやらねばならぬ時が来ました。・・・来たらんとする時代の枢軸転機に当たる我が大日本の使命、豈絶大ならんや。」³⁸

本稿で既に述べたように、王仁三郎の皇道思想は秋山真之のような海軍軍人を魅了したが、その立替立直説は高田のような思想遍歴者にも魅力的であった。理想社会実現への契機であり、宇宙全体の転機につながると高田は見ていた。しかし、こうした高田の純粋な思想からは、王仁三郎の宣教や教団の拡大は許せなかったようであり、大正5年半ばには早くも大本教を見限っている。

同じ宗教遍歴者とはいえ、浅野和三郎や谷口正治のように最後は自らの組織の立ち上げに至った場合もあれば、秋山真之のように神道系教団をわたり歩いて終わったもの、あるいは木原鬼仏のようにフリーランスの術者のタイプ、そして飯森、高田のように帰属すべき組織を捨てて、個人的求道者たちのネットワークを遍歴したものがある。逆にいえば、そもそも王仁三郎自身が丹波のローカルな宗教遍歴者であり、さらには軍人や知識人たちの遍歴者の場を潜り抜けて大本教を拡大していった。

それは他面では、反ユダヤ主義、神智学、スウェーデンボルグ主義などの海外の思想を大本教に取り込む結果となった。あるいはエスペラントや平和活動、宗教間対話など、大正末期以後の大本教の活動には、宗教遍歴者たちの理想を大本教が取り入れたようにも思われる側面もある。

そうした人々を引きつけた大本教の磁場の核に位置するなお＝出口王仁三郎の思想と、その内部における、なおと王仁三郎の相互の影響関係など、さらに見直していくべき問題は多い。ただ、その核にあるのは、昭和になって超国家主義との連携としてはっきりと形を現す、宗教と政治の一体化した、あるべき社会、あるべき国家像の夢想ではなかったかと思われる。それは現実の国家との摩擦という面だけでなく、大本教が提唱した「皇道」という言葉を昭和になると体制側も使用しはじめるように、国家の変貌の先取りをしていたとも考えられる。大本教の

思想的な幅は、「民衆的」と括るには複雑で多様なものである。本論文では、その輪郭を示したにすぎない。今後、大本教だけでなく大正の宗教遍歴者たちの社会論、国家論をさらに詳細に検討していきたいと思う。

なお、今回の論文作成については、資料面では出口三平氏に非常に御世話になった。また舞鶴高専非常勤講師の清水源三郎氏には折々の会話の中でヒントをいただいた。本論文の原型は2008年10月11日京都府立大学で開催された軍港都市史研究会（代表：三川譲二）での発表である。出口、清水両氏ならびに同研究会の諸先生方に感謝したい。

(2009. 11. 06 受付)

- 1 ここでいう「場」は、イギリスの社会学者コリン・キャンベルが提案し、ジョーゲンセンが用いた「カルト的場」cultic milieu という語を念頭に置いている。Danny L. Jorgensen, *The Esoteric Scene, Cultic Milieu, and Occult Tarot* (New York, NY: Garland, 1992)を参照のこと。
- 2 安丸良夫『出口なお』(朝日新聞社、1977) p.85。
- 3 同書、p.86。
- 4 同書、p.92。
- 5 『大本七十年史』上(宗教法人大本、1964) pp.166, 167。
- 6 王仁三郎の経歴については村上重良『出口王仁三郎』(新人物往来社、1973)を参照した。
- 7 『大本七十年史』上、pp.294, 295。なお改正の日付は、改めて国民教化を行うために戊申詔書の出された日である。
- 8 明治32年に出された金明霊学会会則では、第二条に「出口会祖の幽玄聖美なる神訓を顕彰」とあった。池田昭編『大本史料集成II運動篇』(三一書房、1982) p.31。
- 9 『大本史料集成II運動篇』 p.35。
- 10 同書、p.35
- 11 『出口王仁三郎著作集』第1巻(読売新聞社、1972) p.254。
- 12 同書、p.260。
- 13 同書、p.268。
- 14 同書、p.271。
- 15 『大本史料集成II運動篇』 pp.264-266。京都府警警部高芝熊が所蔵していた文書の一部。
- 16 『大本七十年史』上、p.468。
- 17 飯森の伝記的事実については以下の論文を参照した。呉念聖「思想遍歴屋」飯森正芳——ある明治知識人の弛まざる追求——『人文論集』47号(2008)所収。
- 18 「飯森正芳神」『高田集蔵文集』第二集(高田集蔵著書刊行会、1985)
- 19 宮崎の弟子、村田通太郎からの以下のような文章が『村落通信』に掲載されていた。「飯森君は、この勢力はまだ至って小さいから、綾部へ行って力を併せると云い、そして自由の根に神生活の声を大ならしめ、無宗派的団体を綾部に組織しようとする主張されました。」「村田通太郎兄より」『高田集蔵文集』第三集(高田集蔵文集刊行会、1985)。

- 20 浅野和二郎『冬籠』(大日本修斎会、1921) p.35。
- 21 宮飼陶羊が『神霊界』に連載していたモデル小説「桑の葉の茂る頃」では、大本に入った飯森が相変わらず神智学に傾倒していたこと(大正6年7月号)、英語で浅野と議論して大本教が嫌いだと打ち明けたことなど(大正6年9月号)が描かれている。さらに後に『変態心理』第6巻第6号(大正9年12月)に「余が綾部生活の二年」という暴露記事を寄稿しており、その記事にも、飯森が浅野からブラヴァツキーの霊が憑いていると言われたほどに神智学を信奉していたことや、浅野から一方的に批判されていたことが描かれている。
- 22 大正8年2月27日綾部警察署における聴取。『大本史料集成III事件篇』(三一書房、1985) p.25。
- 23 同書、p.27。
- 24 同書、p.29。
- 25 同書、p.29。
- 26 浅野和二郎『出蘆』(大日本修斎会、1921) p.138。
- 27 以下は『神霊界』43号から59号に見る海軍軍人の動向である。綾部の大本本部を訪れた軍人の名前を抜き出した。(鎮魂帰神)などとあるのは修行を行ったとの記述あるもの。綾部を離れたという記述は省略。[]内は、浅野と飯森の動向。

43号 大正6年1月1日発行 [12月11日 浅野和二郎、綾部移住] 12月中旬から月末にかけて舞鶴から海軍軍人、多数到着。 海軍少将 秋山真之。 海軍大佐 桑嶋省三、四元賢助(鎮魂帰神)。 海軍機関大尉 泉富三郎(鎮魂帰神)。 新藤機関少佐、松本海軍少佐、鮫島海軍大尉、武藤海軍大尉、有岡機関大尉、糸満機関大尉、香椎海軍大尉。 22日、呉より竹内機関中尉。 24日 東京より松尾機関中佐。
44号 大正6年2月1日発行 12月28日 舞鶴より松本少佐、立花大尉(鎮魂帰神)。 12月29日 松本、立花が舞鶴を訪問(鎮魂帰神)。 12月30日 有岡機関大尉。 12月31日 松本、立花、香椎。 1月2日 糸満機関大尉、渡邊少尉(鎮魂帰神)。 1月5日 舞鶴より松本、立花、糸満、武藤、佐伯機関少尉(鎮魂帰神)。 1月7日 立花、糸満、佐伯(鎮魂帰神)。 1月11日 立花、糸満、来訪。 1月14日 鎌倉より、松貝機関大尉。 1月21日 篠崎海軍大佐。
45号 大正6年3月1日 2月11日 大沼機関大尉。 [2月2日 飯森正芳、能登へ帰る。20日飯森夫人も家財をまとめて帰る]
46号 大正6年4月1日 2月25日 四元海軍大佐(鎮魂帰神)。 3月16日 浅野正恭海軍少将。 (吾妻の将校は横須賀に帰港しても鎮魂帰神を続け、〇〇機関大尉の天眼通は確実にあった)。
47号 大正6年5月1日 3月17日 篠原国彦海軍大尉。 3月24日 四元海軍大佐。 4月1日 篠崎海軍大佐。
48号 大正6年6月1日 5月4日 呉より竹内機関中尉、横須賀より富井機関少佐。
49号 大正6年7月1日 久しく当地に滞在中の〇〇大尉は、神勅によりて東上。 6月4日 東京より、〇〇海軍大尉。 6月9日 山本英輔海軍大佐。 6月14日 秋山少将(鎮魂帰神)。

54号 大正6年12月1日 10月30日 浅野正恭海軍少将 木村海軍少将、大沼機関少佐、篠崎大佐、佐藤主理ほか大佐級数氏。
55号 大正7年1月1日 糸満大尉(3日間言霊の修行)。 12月18日 矢野祐太郎海軍中佐。 12月19日 竹内海軍機関大尉、来綾。
56号 大正7年2月1日 12月21日 某海軍機関大尉。 12月25日 岡野機関中尉。 12月23日 竹内機関中尉。 12月27日 糸満機関大尉。 12月28日 吉田海軍兵曹、久米機関兵曹。 12月30日 「吾妻」副長駒林中佐、糸満機関大尉。 12月31日 軍艦「薩摩」の組寺、嶋徳。 大正7年1月1日 柏木海軍大尉。 1月5日 栗田貫一海軍機関中尉。 1月12日 吉崎徳一郎海軍機関中佐、来綾。 1月13日 糸満機関大尉以下、「吾妻」の軍人、数多。 1月19日 糸満機関大尉ほか数名。 1月20日 軍艦「吾妻」副長駒林中佐。
57号 大正7年3月1日 1月28日 糸満盛良海軍機関大尉(教主より軍刀を拝受)。 2月3日 後藤充蔵海軍少佐(3日間幽斎修行)。 不明 舞鶴軍港新聞 藤村久吉、前田史郎の両氏、訪問。
59号 大正7年5月1日 3月6日 四元賢助海軍大佐。 3月7日 木佐木海軍機関少将、浅野正恭海軍少将。

28 明治36年12月に出された有馬新一海軍教育本部長「海軍機関学校教育綱領」では、「精神教育ハ寧ろ學術教育ヨリモ之ヲ重視スヘシ」という項目がはずされ、昭和3年6月校令改正まで、訓育(徳育と体育)は重視されなかった。また昭和3年以降も形式的に心理学、論理学、哲学概論などを科目に加えたりしたが、宗教的な教育はなかった、という。堤健男『クリスチャン海軍生徒：海軍機関学校と日本陸海軍人伝道義会』(広島：堤健男、1987)参照。また同書によると大本教の流行のために、大正8年から12年まで機関学校では宗教禁止令が出ていたという。

29 剣山での宝探しは、山本英輔『真理の光』(千代田書院、1952)に記載あり。

30 『冬籠』p.32

31 宮飼「余が綾部生活の二年」では、大正6年6月、秋山邸で、浅野が審神者、海軍軍人を神主に鎮魂帰神を行ったところ、26日に東京に大地震があるという予言があり、浅野もこれを正神と認定、驚愕した秋山は宮内庁などに急報したが、綾部にいた王仁三郎は即座にこの予言を邪神の仕業として怒った。ただし宮飼によれば大正6年6月の大地震説はその前年、横須賀での鎮魂帰神での神憑による託宣をもとに王仁三郎自身が言い出したことだったという。『変態心理』第6巻第6号(大正9年12月)

pp.712-718。なお田中宏巳『秋山真之』(吉川弘文館、2004)には、大正6年7月秋山は海軍将官会議議員になり、名誉職に格上げされているが、同書中にはこの予言事件については言及されていない。秋山は浅野和三郎の教養と学識あふれる人格に憧れて入信したのではないか(同書、p.270)と同書では推定されているが、浅野の記述からすると、鎮魂帰神の現象に惹かれたようである。

32 浅野和三郎『冬籠』(龍吟社、1921) p.146。

33 太霊道の歴史については拙論「太霊と国家」『人体科学』第17巻1号(2008年6月)参照。

34 木原は原坦山の創始した耳根円通法を伝授する心霊哲学会という霊術団体を主宰していた。木原は短期間で大本を離れている。岡田と木原の大本入信については『大本七十年史』上、pp.412-424。

35 『神霊界』80号(大正8年2月15日) pp.7-8。

36 高田の経歴については大竹一燈子『母と私』(築地書館、1984)を参照した。大竹は、高田と社会主義運動家久津見房子の間の長女。

37 同書、p.217。

38 「神秘の扉」『高田集蔵文集』第三集所収。

Religious Milieu of Omoto-kyo in Taisho Era— —Deguchi Onisaburo, Asano Wasaburo and Religious Wanderers

Shin'ichi YOSHINAGA

ABSTRACT : Omoto-kyo had most various adherents in Taisho era. Which would bring forth many off-shoots. In this paper I discuss the interactions between Deguchi Onisaburo and the religious seekers, which could be classified as the founder type like Asano Wasaburo or Taniguchi Masaharu and as the religious wandered like Iimori Masahosi, Akiyama Saneyuki, or Takada Shuzo.

Keywords: Omoto-kyo, Deguchi Onisaburo, Asano Wasaburo, Iimori Masayoshi, Naval officers, Seekers